

國學院大學學術情報リポジトリ

首都圏方言と共通語の境界に関する研究：
漫画作品中の発話を対象に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福池, 秋水, Fukuike, Akimi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002464

題目「首都圏方言と共通語の境界に関する研究
—漫画作品中の発話を対象に—」

本論文は、首都圏方言と共通語とのスタイルの使い分けに関して、主として漫画を題材に研究したものである。

本論文は、以下の章立てによって構成されている。

- 第1章 序論
- 第2章 研究の背景
- 第3章 日本語教育と首都圏方言
- 第4章 『新東京都言語地図』に見る首都圏方言の特徴的な表現 — 「スイマセン」とラ行音の撥音化—
- 第5章 漫画作品を対象とする研究について
- 第6章 漫画作品中に見られるラ行音の撥音化の傾向 — 『きのう何食べた?』を題材に—
- 第7章 人間関係の変容にともなう話し方の変化 — 『きのう何食べた?』を題材に—
- 第8章 人間関係の変化にともなうスタイル・シフト — 『海街diary』を題材に—
- 第9章 総括

以下、各章を要約する。

第1章では、本研究の着想にいたった経緯について述べた。

日本語話者は、地域方言と共通語を多層に使い分ける言語生活を送っている。首都圏もその例外ではない。首都圏で生まれ育った人々は、日常の生活語である話しことば（首都圏方言）と改まった場や書き言葉で用いることば（共通語）を使い分けて暮らしている。ただし、首都圏方言には、他の地域と比べると、形式が共通語に近いこと、その地域の伝統的な方言が受け継がれないこと、話者自身の方言意識が低いこと、等の特徴がある。首都圏方言は共通語と形式が近いため、首都圏方言の話

者自身も、また、日本の他の地域の人々も、首都圏方言と共通語を同一視している場合が多いと考えられる。

また、日本語を母語としない学習者にとっては、教室で学んだ、共通語に近い規範的な日本語と、現実社会で接する日本語との間に隔たりがあることに戸惑い、コミュニケーションに支障をきたすケースもある。明確な支障がなくても、共通語的な表現しか習得していない場合は表現の選択肢が狭く、細やかな心情や意図を伝えきれないことが懸念される。

そこで、本論文では、首都圏方言話者が共通語と首都圏方言をどのように使い分けているかを研究することとした。

第2章では、研究の前提として、用語の整理を行った。標準語・共通語・首都圏方言という術語については研究者によって多様な見解がある中で、本論文では標準語は規範性を、共通語は地域を超えた共通性を最重要視した役割を持つ言語の体系を指す概念であると捉えることとした。また、首都圏方言は比較的新しい概念であるため、学界において定義が定まっているとはいえない。「首都圏とされる地域の話者が用いる方言」と定義づけることができるが、首都圏とはどの地域を指すかという点にも議論の余地がある。本論文では、「自分は標準語(共通語)を話す」という意識を持ちやすいと考えられる地域として、東京、神奈川、千葉、埼玉に住む人々の話しことばを首都圏方言と定義づけることとした。

第3章では、日本語教育における日本語観や、話しことばの扱われ方についてまとめた。現在の日本語教科書を見ると、多様なニーズや背景を持つ日本語学習者に対応するため、「標準語(正しい日本語)」を体系的に教えるというよりも、「コミュニケーションを重視した日本語」や「伝わる日本語」を志向する動きが見られるようになってきている。実際の教材の例として、初級レベルを学ぶための総合日本語の教材のうち、『みんなの日本語初級 第2版 本冊』(スリーエーネットワーク, 以下『みんなの日本語』)、『初級日本語 げんき [第2版]』(ジャパントイムス, 以下、『げんき』)、『まるごと 日本のことばと文化 A1/A2/B1』(三修社, 以下『まるごと』)を挙げる。これらの教科書を概観すると、『みんなの日本語』では、別冊の文法解説に「してる」「しとく」の表現について触れられているが、本冊にはほとんど取り扱われていない。しかし、『げんき』や『まるごと』では、「している」→「してる」等の縮約形が取り入れられており、また、『げんき』は改定の際に名詞の否定文を「～じゃありません」から「～じゃないです」に変更する等、母語話者

の使用実態を反映しようとする努力が見られる。このように、初級総合教科書においても、程度の差はあるが、首都圏方言の特徴的な表現が部分的に取り上げられているものがある。一方、同じく首都圏方言の特徴の一つであるラ行音の撥音化がどのように扱われているかを調査したところ、ほとんど扱われていないこともわかった。

日本語教科書では、取り上げる言語項目を取捨選択しながら目的に合わせてシラバスを組み立てるため、当然すべての言語事象が組み込まれるわけではない。また、日本語の文法を体系的に教授するため、規範的な文法を優先するという事情もあると思われる。しかし、母語話者と同じように話したいという学習者も存在することを考えれば、個別のニーズに対応するための基礎研究として、首都圏方言のありかたについての研究や、それを教育につなげる実践の積み重ねも必要ではないだろうか。

第4章では、首都圏方言の実態調査として、『新東京都言語地図』(2018)を利用し、言語地図にあらわれた平成初期の首都圏方言の実態を分析した。『新東京都言語地図』は、平成元年(1989年)から平成4年(1992年)に行われた言語調査を地図化して作成された言語地図である。その中から、首都圏方言の特徴といえるものとして、ラ行音の撥音化(わからない→ワカンナイ等)と「すみません」が「スイマセン」になる現象について取り上げた。そして、これらの表現が東京全域に広がっていることを確認した。一方で、これらについては、どちらかだけを使用するという回答よりは両者を併用するという回答が多かった。そこで、これらの表現が首都圏方言では文体等によって使い分けられていることが予測された。

第5章では、研究対象とするメディアを検討した。話しことばを記述・研究しようという試みにおいて、その対象となるデータには、内省、自然談話、人工的に生み出したロールプレイのような談話等さまざまなものが考えられるが、その中に、フィクション作品が挙げられる。フィクション作品に見られる話しことばは、作り手が自然談話に近づけよう意識して作り上げた人工的なやりとりである。すぐれている点は、同じ話し手のさまざまな場面における談話を収集できる点や、場面設定がはっきりしており、発話の意図や感情がはっきり説明されている場合がある点が挙げられる。また、漫画や小説のような作品では会話が文字で記述されており、分析しやすい点も長所である。一方、短所としては、実際のやりとりでは使われないような表現が使われる可能性があることが挙げられる。

本研究の目的に照らし、同じ話者がさまざまな場面でどのようにスタイルを使い分けるかが観察できること、作り手の中の言語体系を反映することから、フィクション作品がデータとして最も適していると考えた。そして、フィクション作品の中にもドラマや映画等映像作品、漫画作品、小説等の文字のみで表現された作品等さまざまなジャンルがある中から、漫画を研究対象に選んだ。これらのジャンルを比較すると、漫画は、文字情報とビジュアル情報の両面を持つメディアである。データ収集資料としての観点からみると、文字情報は小説に比べると少ないものの、ビジュアル情報が添えられているため、発話の意図がわかりやすいという特性がある。映画も音声情報を文字起こしすれば文字データとなりうるが、漫画の場合は基本的に作者が書いたものが直接掲載されているため、表記についてまでが資料となりうる。また、映像作品と比べて漫画は少人数の作り手が会話を作り上げているため、作り手の言語意識が反映されやすいと考えられる。つまり、漫画の中の登場人物の話しことばを観察することで、その作者である漫画家の言語意識を窺うことができるといえる。そのため、本研究の目的には漫画作品をデータとすることが最もかなっていると判断した。また、漫画は日本語教育のリソースとしても用いられているほか、近年は多くの学習者が教室以外の場で日本語の作品に触れることや、日本人との交流、独学を通じて自律的に日本語を学んでいる。漫画作品の持つ自律学習の素材としての価値の観点からも、漫画作品の中のことばの研究には意義があると考えている。

漫画のことばを取り上げる上で、役割語という概念も重要である。役割語とは、特定の人物像と結びつけられたことば遣いを指し、漫画等のフィクション作品の中で用いられる誇張された言い回しが注目されている。そのため、漫画の表現を研究することは現実の言語使用の研究にはつながらないという議論もあるだろう。しかし、フィクション作品で用いられることばは、役割語と呼ばれるものも含め、現実の言語使用と相互に影響を与え合っており、連続性のあるものだと考えている。話し手は、自分が見聞きしてきた言語運用の場面からそれぞれの言い回しの持つイメージをつかみ、自分に合った表現やその場にふさわしいスタイルを選択している。一方、フィクション作品の作り手は、現実の世界で用いられることばのあり方を考慮し、より効果的になるように漫画の話しことばを組み立てていると考えられる。このように考えると、漫画等のフィクション作品のことばも現実の言語使用と分断されたものではなく、このようなことばを分析することにも、実際の言語使用の参考に

する上での意義があるといえよう。

具体的に取り上げる作品については、作品の舞台が現代の首都圏であることや登場人物の年代等を考慮して検討し、よしながふみ『きのう何食べた?』1巻～14巻(2007～連載中)および吉田秋生『海街 diary』1巻～7巻(2007～連載中)を研究対象とすることとした。

第6章では、第4章の言語地図を用いた研究で併用の回答が多かったラ行音の撥音化について、漫画作品『きのう何食べた?』を題材に、作品中の使用実態を調査した。ラ行音の撥音化とは、「わかんない」が「わかんない」になるように、ラ行の音が環境によって撥音「ん」に変化する現象のことである。首都圏方言に限らず、他地域の方言でも見られる現象であるが、共通語に対する首都圏方言の特徴の一つとして取り上げる。本研究では、本来ラ行で発音される拍の次の子音がダ行、ナ行、ジャ行という音環境のもので、品詞が動詞(助動詞の部分を含む)・補助動詞・指示詞・疑問詞・接続詞であるものに限って取り上げた。そして、作中の登場人物ごとに、どんな場面で撥音化が起きているかを観察した。その結果、作中の登場人物はラ行の撥音化を使用するかどうかという点で個人差があった。主人公である40代男性の笈史朗は、恋人に対してはよく撥音化を起こし、職場でも撥音化する場合があるが、両親にはほとんど撥音化を使用しない。物語の冒頭では、史朗は両親との関係が良好ではなく、距離を置きたいと意識している様子が繰り返し描写されている。史朗が両親に対してラ行音の撥音化を起こさないという描写は、両親に対するよそよそしさの表現である可能性がある。このように、ラ行音の撥音化の有無が上下関係による区別というよりは心的距離や緊張感の有無が影響していると考えられるケースも見られた。

第7章では、第6章の研究結果を受け、引き続き漫画作品『きのう何食べた?』を題材に、人間関係の変容によって作中の人物・笈史朗の言語使用が影響を受けるかを観察した。この作品では、主人公の笈史朗とその両親との長期間における関係の変化が描写されている。冒頭では史朗は両親と距離を置こうと努めているが、エピソードを重ねるにつれ、両親に対して少しずつ歩み寄るようになり、第69話で両親に自分の考えを伝え、自分で納得のいく関係に落ち着くことができた。本研究では、このエピソードをストーリー上における人間関係の緊張感の緩和が起きた時点と見なしている。

この人間関係の変容を軸に、史朗の言語使用について観察した。まず、ラ行音の撥音化について、史朗は、この時点以前には一度も両親に対し

てラ行音の撥音化を起こしていないが、関係の変化直後の両親とのエピソードでは使用している。また、終助詞の使用についても調査したところ、史朗は第69話以降では終助詞「ね」「さ」をそれ以前より多く使用していることがわかった。これは、史朗が両親に心を許してフランクなことは遣いになったことを表現していると考えられる。このことから、史朗の両親に対する感情や接し方の変化がことば遣いに影響し、より首都圏方言的なスタイルで話すようになったという表現である可能性が示唆されるが、第69話以降の話数がまだ少なく、ラ行音の撥音化の使用回数も限られており、今後もう行音の撥音化の使用が続くかどうかは連載を追いながら調査していく必要がある。

また、終助詞の使用傾向も史朗は男性の同僚や恋人に対しては「ぞ」「ぜ」といった男性性の強い終助詞を用いるが、両親には用いない。このことは、史朗が相手によって異なる面を見せていることを示唆する。すなわち、両親に対しては「やさしく親孝行な息子」、恋人に対しては「男らしく頼りがいのある恋人」という人格を見せているのである。定延(2011、2018)は、このように状況に応じて変化する人間性を「キャラクタ(キャラ)」と呼んでいるが、史朗のこのようなふるまいも、キャラクタの切り替えを行っているとして解釈できる。

第8章では、人間関係の変容による首都圏方言の使用の変化について、他の作者による作品でも検証するため、漫画作品『海街diary』を題材とした。そして、作中の一組の人間関係の変容を追いながら、首都圏方言の特徴的な表現である縮約化や助詞の省略がどのような場合に強く現れるのかについて調査した。その結果、この2人の人物が親しくなるにつれて首都圏方言の特徴的な表現が使われやすくなりながら、場面や話題によって細かいスタイル・シフトが起きる様子等が観察できた。同じ場面で同じ人物が話していても、職場の話題になったときと雑談やプライベートの話題になったときとでスタイル・シフトが複数回生じており、スタイルの使い分けが上下関係・親疎関係だけでなく、場面や感情によっても起きていることを確認できた。また、「もう敬語を使わないでほしい」という明示的な要請によって起きるスタイル・シフトも見られた。このような描写から、首都圏方言と共通語の使用場面がはっきり分けられず、微妙な関係性や感情の変化によって揺れ動いている様子が観察できた。

第9章では、本論文の全体を総括し、今後の課題と展望について述べた。

本研究から、首都圏方言話者の話しことばは、共通語と明確な線引きをすることが難しく、さまざまなスタイルの間を揺れ動きながら表現されているといえることがわかった。他の方言でも同様であると考えられるが、特に首都圏方言の場合は、言語形式が似通っているため、共通語と首都圏方言の差をスタイル差ととらえられる側面もある。首都圏方言の話者は、非常に改まった場で使われるような共通語に近いスタイルから、極端にくだけた話しことばまでのグラデーションを意識的・無意識的に使い分けている。関係性の変化や話題等によって、共通語に近い領域と、方言色の濃い領域の間を行き来しながら、話し手の微妙な心情や意図を表現している。首都圏方言はこのような豊かなバリエーションを持ち、日常のあらゆる場面の言語生活を支える方言であるということがわかった。

この研究結果は、日本語学習者に対しては、日本語の特性を示し、主体的な日本語の話し手となれるためのヒントを与える際に有用であると考えている。また、漫画を利用した研究でこのような結果が得られたことについても、今後ますます学習方法が多様化する日本語学習者にとって、漫画をリソースとした自律学習から首都圏方言話者の言語実態を学ぶことができるという可能性を示すものと考えられる。

また、多文化共生が進む日本では、日本語を教室ではなく生活の中で習得していく人々も増加し、日本語教育を専門としていない母語話者でも、そうした人々と日本語を用いて交流する機会が増えていくと考えられる。そうした状況の中では、日本語母語話者に対しても、自身の話す日本語に意識的になり、必要があれば相手に合わせて調整していく能力が必要とされる。したがって、首都圏方言の話者自身にとっても、自分たちにも方言があり、共通語との使い分けを行っているのだという意識を持つことには価値があると考えている。

以上のように、本論文では、首都圏方言と共通語の使い分けについて、その背景や研究の観点の整理、具体的な研究方法を設計するところから始め、限られた言語事象や少数の事例を基に考察を行った。その結果、共通語的なスタイルを含む首都圏方言の多様な話しことばについて、その使い分けの中でどのような現象が起きているかをある程度明らかにすることができたと考えている。

今後の課題としては、まず、データの収集範囲や量、研究対象とする言語事象を拡大し、量的な分析の観点を取り入れることが挙げられる。言語事象については、縮約形や文末表現に研究範囲を広げること、また

題材については、取り上げた 2 編の作品における別の登場人物の発話や、別の漫画作品、また、漫画以外の題材を活用した研究が必要だと考えている。

次に、研究結果を日本語教育に対して応用していくため、日本語教育における具体的な実践を行い、結果を共有して、話しことばの教育に貢献していくことも今後の課題である。

最後に、共通語と首都圏方言という枠以外にも、漫画を題材とした話しことばの研究にはまだ発展の余地があると考えている。

以上のような課題について今後も研究を続け、結果を発信していきたい。